『約束された場所で：underground2』
文春文庫　2001

524円(税別)

村上　春樹

村上春樹と言えば、わざわざ断るまでもない。ここ最近では小説『１Q84』で話題の作家である。彼は、1997年刊行の『アンダーグラウンド』以来、極めて精緻な興味深いノンフィクションも手がけている。『アンダーグラウンド』は、1995年の地下鉄サリン事件の被害者及び遺族の声を丁寧に聞き取った貴重な証言集である。

ここでご紹介する本書は、『アンダーグラウンド』で＜正体不明の脅威＝ブラック・ボックス＞として捉えられていたオウム真理教教団という存在を、内側から開いてみせる試みだ。信者（元信者）８人の気持ちや主張を聞き書きした内容である。宗教的プロパガンダとなるのでは、内容が真実と異なるのでは、などの懸念に対し、村上氏の姿勢は潔い。

> 私の仕事は人々の語ることを聞き、語られたことをなるべく読みやすい文章にすることである。そこにいくつかの事実的齟齬があったとしても（たとえば記憶というのは不安定なものだし、理論的に定義するならそれは事実の個人的組み替えに過ぎない）、そのような個人的物語の集積の上に生まれた＜集合的物語＞の中には、ひとつの力強い確かな真実性が含まれている。それは我々小説家が日々痛切に体験していることである。私はこれが小説家の仕事なのだと考えるのは、そのような文脈においてである。(15頁)

インタビュー記録は、信者（元信者）のオウムへのコミットの強弱によって語られ方にさまざまな幅があるが、とりたてて私（たち）と変わりがあるという印象は受けない。あるとすれば、より純粋、より一途、という印象を受けるくらいである。そんな彼らがなぜオウムに、またそもそもオウムとはいったい何か…これら、こみ上げてくる問いに対して、所収されている河合隼雄氏との対談や「あとがき」には、いくつもの示唆がちりばめられている。

> 僕らは世界というものの構造をごく本能的に、チャイニーズ・ボックス（入れ子）のようなものとして捉えていると思うんです。…僕らが今捉えている世界のひとつ外には、あるいはひとつ内側には、もうひとつ別の箱があるんじゃないかと、僕らは潜在的に理解しているんじゃないか。…ところがオウムの人たちは、口では『別の世界』を希求しているにもかかわらず、彼らにとっての実際の世界の成立の仕方は、奇妙に単一で平板なんです。(295-296頁)

世界の説明が平板で、混乱や矛盾などの不可解さを許容できないということ。この信者のありようは、とりわけ集団（マス）となったときのわれわれとどこか似ていないか。「わかりやすさ」を賞賛し、システムに対して性急に正答や出口を見いだそうとする昨今の世論、そして、混乱や矛盾の実体らしきものさえ排除すればシステムは浄化されるとする風潮。個々のわれわれの多くは、現実が混乱や矛盾を含むという「本能的コモンセンス」(276頁）をもっているにもかかわらず、集団となったときの論理が、信者のありようと似通ってくるのは興味深い。

オウムの教祖が描き、多くの信者が共有した破壊的で平板な物語に、われわれ個々の「本能的コモンセンス」はどのように立ち向かえるのだろう。村上氏のような小説家の手によって、「本能的コモンセンス」を糧とした強い物語が顕在化させられるのだろうか…悪とはなにか、システムとはなにか、物語とはなにか。再び、あれこれ考えさせられる本である。（本研究所研究員 萩原修子 文化人類学・宗教学）